

第6回「泉大津市オリウム随筆賞」

【佳作】

父の作業着

森千恵子・福岡県

晴天に恵まれた日、夫のスニーカーを洗った。庭の小さな洗い場にしゃがみ込んで、ときどき空を見上げ、ブラシに力を込めた。きれいになったのを干していると、子供の頃の手伝いを思い出した。

小学三年生のとき、担任の先生が、

「夏休みの間、ひとつだけ目標を決めて、お家の人に喜んでもらえるお手伝いをしてください」

人差し指を掲げて微笑んだ。さっそく家で、

「夏休みのお手伝いは、何がいいかなあ」

考えていると、母が手を叩いた。

「そうだ！お父さんの運動靴を洗ってもらおうかな。きつと、喜ぶと思うよ」

父は、セメント会社の機械技師だった。毎週日曜日の朝、父の作業着上下と運動靴を、母が洗っていた。服は会社の制服なので、どの部署も同じものだが、父の作業着だけは汚れがひどかった。いつも黒い機械油のシミが点々と付いている。母は庭にたらいを置き、洗濯板の上で大きな石鹸を転がしながら、一生懸命に洗った。

「油污れは、なかなか落ちないねえ……」

私が声をかけると、

「お父さんが、真面目に働いている証拠よ」

母の手に、いちだんと力がこもった。父は機械が故障すると、深夜でも早朝でも休みなく飛び出していた。セメントを作る回転ガマ（キルン）が、元気に動くことが父の喜びだったのだ。ベージュ色の作業着は厚手の丈夫な綿素材なので、絞るのもひと苦労だった。

「よし、決めた！お父さんの作業着と運動靴は、私が洗うよ。任せておいてね」

こうして、肩凝りのひどい母を手伝うことが、夏休みの目標になった。洗濯が終わると、

「まあ、きれいに洗えたね！」

母がほめてくれるので、嬉しくなった。庭先の物干し竿に吊るされた作業着と靴から、ポタポタと雫が落ちる。それを私は、満足しながら目で追った。するといつの間にか、後ろに父がニコニコしながら立っている。

父はとても寡黙な人だったので、めったに言葉を交わすことはなかった。おしゃべりな私が、一方的にあれこれ話しかける。父は、黙って聞いてくれた。たまに「うん」とか「ああ、そうか」と返事をするのがせいぜいだった。父が、洗濯物をじっと見ている。

「乾いたら、もっときれいになるんだよ」

私が得意になると、父が笑顔で言った。

「おーおきに！」

たった一言だったが私は嬉しくて、心地好い達成感に浸れた。小学四年生になると、我が家にも洗濯機がやってきた。渦の中で作業着がグルグル回るのを、飽きずに眺めたものだ。油污はなかなか取れず、仕上げにはまた洗濯板を使った。絞るのは、ずいぶんと楽になった。ローラー式の絞り機に挟んで、ゆっくり回すとよく絞れた。

そんなある日、道端で近所のおじさんに会った。彼は、父と同じ職場で働いていた。

「やあー、ちいちゃん、聞いたよ。おりこうさんだつてね」

「えっ！おじちゃん、何のこと？」

「お父さんの作業着と運動靴、毎週きれいに洗っているそうだね」

私の頭をなでながら、微笑んでいる。私には「おーおきに」とだけしか言わない父が、会社で話していることに驚いた。だが私は、照れながらも嬉しくてたまらなくなった。

「ずっと、洗濯を続けよう」

それからは、父にもっと喜んでもらおうと、気合いを入れた。中学生になると、帽子も洗えるようになった。帽子の正面には小さなポケットがあり、違い釘抜きの社章の縫い取りがあった。そこは、父のヘソクリの隠し場所だった。ときどき、小さくたたんだお札を取り出して、お小遣いをくれながら言った。

「いつも、おーおきに」

そっと見ていた母も、喜んでくれた。

「お父さんは、とても嬉しいのよね！」

私は大きくなるに従って、父への感謝の念を抱くようになった。元気で黙々と家族のために働いてくれる、真面目な父が大好きだった。だが、面と向かって「ありがとう」というのは照れくさかった。

「お父さん、いつまでも、元気でいてね」

ブツブツ言いながら、心を込めてブラシを往復させているうちに、作業着はきれいになった。小さな手伝いは、高校を卒業して故郷を離れるまで続いた。

今でも、ときどきふるさとを訪ねると、工場の近くをウロウロしてみる。すると、あの作業を着た人に出会う。遠くから近付いてくる人と、遠い日の父が重なり懐かしさでいっぱいになる。大きなたらい、使い込んだ洗濯板、手に余る石鹼、洗濯機の渦、手で回す絞り機、そして作業着姿の父の笑顔。今でもどこからか「おーおきに」という父のやさしい声が聞こえてくるようだった。